

# じつきょう

## 商業教育資料 No. 118 通巻406号



### 「観点別学習状況の評価」にどう取り組むか

京都大学 教授  
西岡加名恵

#### 1. 「観点別学習状況の評価」の進め方

現在、高等学校においては、「観点別学習状況の評価」（以下、観点別評価）をどう進めるかが注目されている。2018年改訂学習指導要領では、「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」という3つの柱で捉えられる「資質・能力」の育成が目指されている。それを受けて、2019年改訂指導要録では、「知識・技能」、「思考・判断・表現」、「主体的に学習に取り組む態度」の3観点で評価するという方針が示されている。

観点別評価については、小・中学校では既に2001年改訂指導要録から「目標に準拠した評価」として進められてきた。そこでは、多くの場合、表1（次頁）のような方式で学力評価計画が立てられてきた。つまり、各観点を各単元に当てはめ、それをさらに細分化した評価項目に分析し、それらの項目の達成率で成績をつけるという方式である。

しかし、この方式には多くの問題点がある。まず、目標・評価規準（基準）が限りなく細分化し、教師が多忙化する。また、この計画では、どこにも評価方法が表れない。したがって、総合的な「思考力・判断力・表現力等」が評価できるか、疑問が残る。尺度がバラバラの状況なので、どの程度の学業達成が見られたら「良し」と判断できるのかが、不明である。また、単元1から単元Yまでの合計点で成績をつける場合が多いため、形成的評価（授業改善のための評価）と総括的評価（指導後の状況を記録するための評価）の区別がついていない。

では、どうすればよいのか。お勧めしたいのが、表2（次頁）の方式である。まず各観点に対応させて、どのような評価方法を用いるのかを決める。そのうえで、どの単元の内容に対応させて、どの評価方法を用いるのかを決める。年間を通して長期的に学力を伸ばし、最終到達点を踏まえて成績づけをする。

#### も く じ

「観点別学習状況の評価」にどう取り組むか	1	探究学習のヒント おカネの正体は？	18
主体的・対話的で深い学びから探究活動へ	6	静岡県立富士宮北高等学校×	
観光ビジネスに向けた実践報告	10	事例探究ワークブック ビジネス編	
		活用事例インタビュー	22
文部科学省「地域との協働による高等学校 教育改革推進事業」プロフェッショナル型 愛翔・あいちビジネスプロジェクト	14		

表1 学力評価計画の立て方：目標分析による方式（イメージ・筆者作成）

観点	単元1	単元2	・・・	単元X	単元Y
主体的に学習に取り組む態度	評価項目 1a 評価項目 1b 評価項目 1c	評価項目 2a 評価項目 2b 評価項目 2c	・・・	評価項目 xa 評価項目 xb 評価項目 xc	評価項目 ya 評価項目 yb 評価項目 yc
思考・判断・表現	評価項目 1d 評価項目 1e 評価項目 1f	評価項目 2d 評価項目 2e 評価項目 2f	・・・	評価項目 xd 評価項目 xe 評価項目 xf	評価項目 yd 評価項目 ye 評価項目 yf
知識・技能	評価項目 1g 評価項目 1h 評価項目 1i	評価項目 2g 評価項目 2h 評価項目 2i	・・・	評価項目 xg 評価項目 xh 評価項目 xi	評価項目 yg 評価項目 yh 評価項目 yi

表2 学力評価計画の立て方：三次元モデル（イメージ・筆者作成）

観点	評価方法	単元1	単元2	・・・	単元X	単元Y
主体的に学習に取り組む態度	パフォーマンス課題		○	・・・		◎
思考・判断・表現						
知識・技能	筆記テスト/ 実技テスト	◎	◎	・・・	◎	◎

※○が指導する観点，◎が成績づけに入れる観点を示す。

国立教育政策研究所「学習評価の在り方ハンドブック・高等学校」（2019年。以下「ハンドブック」）でも、評価時期については、「各教科における『知識・技能』及び『思考・判断・表現』の評価の記録については、原則として単元や題材などのまとまりごとに、それぞれの実現状況が把握できる段階で評価を行う」、「複数の単元や題材などにわたって長期的な視点で評価することを可能とする」と明記されている。

## 2. 多面的・多角的な評価——パフォーマンス評価の必要性

ここで、そもそもなぜ観点別評価なのかを考えておこう。観点別評価は、「資質・能力」の育成をバランスよく図っていくためのものである。中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」（2016年。以下「答申」）では、「資質・能力のバランスのとれた学習評価を行っていくためには、指導と評価の一体化を図る中で、論述やレポートの作成、発表、グループでの話し合い、作品の制作等といった多様な活動に取り組ませるパフォーマンス評価などを取り入れ、ペーパーテストの結果にとどまらない

い、多面的・多角的な評価を行っていくことが必要である」と述べられている。

パフォーマンス評価とは、知識や技能を使いこなすことを求めるような評価方法の総称である。先の「答申」に言われているパフォーマンス評価は、実質的には、様々な知識やスキルを総合して使いこなすことを求めるような複雑な課題（パフォーマンス課題）を指していると考えられる。パフォーマンス課題には、レポートなどのまとまった作品を求めるものや、プレゼンテーションなど一連のプロセスを実演することを求めるものがある。資料1には、高等学校で実践されているパフォーマンス課題の例を示している。

### 資料1. パフォーマンス課題の例

#### 【国語】（渡邊久暢先生の実践）

あなたは、WebCMプランナーです。若狭高校校長から「学校PR用のWebCM」を作成して欲しいという依頼を受けました。中学生の本校志願者を増やすことに貢献するWebCMの作成企画案を校長にプレゼンテーションすることがあなたの目的です。

- あなたは、1 誰をターゲットにするのか。
- なぜそのような内容・構成のCMにする

のか、について、校長に納得いく提案を行わなければなりません。提案は教室において、他の提案者のいる中で、校長に口頭で行います。図や表、動画を提示することは可能です。校長に6分で説明した後に、4分間の質疑応答時間を設けます。〔後略〕

#### 【社会】（松岡真徳先生の実践）

あなたは2学年の担任となり次年度の修学旅行を企画することになった。本日は、その企画「世界の生活を体験することで、私たちは何を学ぶのか。～〇〇（国・地域名）で現地の家庭に1週間のホームステイ～」の旅行内容を学年団の先生たちと検討する会議である。〔中略。提案内容を班ごとに分かりやすくまとめ〕5分以内でプレゼンテーションを行うこと。

#### 【数学】（中本俊宏先生の実践）

博伸くんの高等学校では、文化祭の看板を学校の屋上から垂れ幕にして設定することにしました。看板には多くの人が通行する道路から見える高さに設置したいと考えています。しかし、校舎と道路の間には三高会館が立っています。そこで博伸くんは、道路から看板が見えるようにするため、校舎の高さと地上からの看板の高さについて考えました。〔中略〕道路から看板が見えるようにするため、どのように看板を設置すると考えますか。その「看板の高さを求める方法」を説明しなさい。

#### 【理科】（池恩燮先生の実践）

あなたは中学校に勤める養護教諭です。冬になりインフルエンザが流行する前に授業で、インフルエンザウイルスが体内に入ると何が起きるのかとその予防について生徒たちに説明しようと考えました。生徒たちが分かり易いように紙芝居で説明しようと考えています。紙芝居の時間は、4分です。

（出典：西岡加名恵編著（2020）『高等学校 教科と探究の新しい学習評価』学事出版）

パフォーマンス課題については、各教科の中核に位置するような重要な内容を見極めるのに役立つ「本質的な問い」に対応させて作るとよい。資料1の課題の場合は、それぞれ、「目的や場に応じたプレゼンテーションを行うには、どうすればよいか」（国語）、「諸地域の自然環境は、多様な人間生活にどのような影響を及ぼし各地を特徴づけるのか」（社会）、「三角比というアイデアを上手に生かす方法はどのようなものか」（数学）、「人は、体外からの異物の侵入に対して、どのように体内の恒常性を保ちながら生きているのだろうか」（理科）という「本質的な問い」に対応させて開発されている（パフォーマンス課題の詳細については、『じっしょく商業教育資料』106号掲載の拙稿も参照されたい）。

### 3. 評価基準の明確化

パフォーマンス評価の方法を用いる場合、○か×かでは採点できない。そこで、評価基準としては、ルーブリックが用いられる。ルーブリックとは、成功の度合いを示す数レベル程度の尺度と、それぞれのレベルに対応するパフォーマンスの特徴を説明する記述語から構成される評価基準表である。必要な場合には、複数の観点を設定する。たとえば、表3（次頁）は、中学校英語科において、「自分の尊敬する人について後輩に紹介する」ことを求めるパフォーマンス課題に対応させて開発されたルーブリックである。「内容」と「英語表現」という2つの観点について、レベル1～4で評価するものとなっている。

特定課題ルーブリックは、典型的には資料2のような手順で作ることができる。

#### 資料2. 特定課題ルーブリックの作り方

- ① パフォーマンス課題を実施し、生徒の作品（完成作品や実演）を集める。
- ② パッと見た印象で、「5 すばらしい」「4 良い」「3 合格」「2 もう一步」「1 かなりの改善が必要」という5つのレベルで採点する。複数名で採点する場合は、

お互いの採点が分からないように、採点を作品の裏に貼り付けるなどの工夫をするとよい。

- ③ 全員が採点し終わったら、付箋紙を作品の表に貼り直し、レベル別に作品群に分ける。複数名で作る場合は、意見がだいたい一致した作品群から分析するとよい（評価が分かれた作品については、よけておく）。それぞれのレベルに対応する作品群について、どのような特徴が見られるのかを読み取り、話し合いながら記述語を作成する。
- ④ 一通りの記述語ができれば、評価が分かれた作品について検討し、それらの作品についても的確に評価できるように記述語を練り直す。
- ⑤ 必要に応じて評価の観点を分けて、観点別ルーブリックにする。たとえば、観点によって複数の生徒の作品の評価が入れ替わる場合には、観点を分けた方がよい。ただし、観点については分けすぎると煩雑になるため、多くても2～6個にとどめることが望ましい。

この手順でルーブリックを作った場合、各レベルに対応する典型的な作品（これを「アンカー作品」と言う）を整理することができる。ルーブリックには、そのようなアンカー作品を添付して

おくと、各レベルで求められているパフォーマンスの特徴をより明確に示すことができる。

このように共同でルーブリックを作れば、評価の観点や水準を共通理解することができる。つまりルーブリック作りは、評価の比較可能性を高めるモデレーション（調整）の有効な方法となる。

なお、一人でルーブリックを作らざるをえない場合も、基本的には生徒の作品をレベル別に分類して作成することが有効である。たとえば、作品を「優れている」「普通」「改善が必要」といったレベル別に分け、理由を書きだす。必要に応じて観点を分けて、記述語を作成する、といった方法が考えられる。

ルーブリックについては、それまでに指導した生徒の実態を踏まえて、予備的に作ることも考えられる。しかしながら、その場合も、生徒の作品を集めた上で資料2の手順でルーブリック作りに取り組み、適切な評価基準が設定できているか検討することを勧めたい。生徒作品を用いてルーブリック作りをすることで、生徒の実態をより明瞭に捉えることができ、指導方法の改善点を構想するのにも役立つからである。

#### 4. 各観点と評価方法の対応

以上を踏まえると、各観点と評価方法の対応関係をどのように考えることができるだろうか。学力の実態に注目すれば、「思考・判断・表現」を

表3 課題「私が尊敬する人」のルーブリック

		内容	英語表現
A	4	自分の感じたこと、考えたことなどを、理由や例をあげ、自分のことと関連づけながら伝えようとしている。	かなり長い英文が、少しの間違いはあるものの、ほぼ正確に書けている。また、自分の考えを伝えるための適切な表現をしている。
B	3	自分の感じたこと、考えたことなどをはっきりと伝えようとしている。	それぞれの文は短い、適切な表現を用い、語順などが正確に書けている。
C	2	調べた事実はわかるが、自分の考えがあまり伝えられていない。	単純な文は書けているが、少し複雑になると適切な表現が用いられておらず、語順などに正確さを欠く。
	1	調べた事実も内容が乏しく、自分の考えが伝わっていない。	全体的に語順が不正確で、適切な表現が用いられていない。大文字、小文字、符号なども不正確な部分が少なからず見られる。

（出典：森千咲子（2008）「自分の考えを自分の言葉で表現する」西岡加名恵「『逆向き設計』で確かな学力を保障する」明治図書、p.114）

するには必ず「知識・技能」を用いることになるし、「思考・判断・表現」をする際には必ず「態度」が伴っている、という具合に、3つの観点を明確に分けることは不可能である。そこで、各観点と評価方法の対応関係については、「資質・能力」をバランスよく育成するという趣旨を踏まえつつ、あくまで便宜上、整理することとなる。各観点と評価方法をどう対応させるかの判断は各学校に委ねられているが、ここでは基本的な考え方を提案したい。

パフォーマンス課題は、知識・技能を活用しつつ思考・判断したことを表現する課題となる。したがって、観点「思考・判断・表現」に対応する評価方法として適していると考えられる。ただし、教科によっては、自由記述式の問題を使った筆記テストを使うという判断もありうるだろう。

一方、「知識・技能」を幅広く習得できているかを見るには、パフォーマンス課題は適していない。要素的な「知識・技能」が身についているかは、従来のような筆記テスト・実技テスト等で評価するのが適していると考えられる。重要な「知識・技能」の項目をリスト化し、それらを幅広く習得できているのかを確認することとなる。

観点「思考・判断・表現」と観点「主体的に学習に取り組む態度」について区別することは、さらに困難である。2019年の指導要録改訂に向けて議論を行った中央教育審議会の作業部会においても、知識・技能を「意欲」や「態度」と総括的に扱うべきではないといった意見が出されていた（『日本教育新聞』2017年12月18・25日号）。

その後の議論を経て、「主体的に学習に取り組む態度」については、「①粘り強い取組を行おうとする側面」「②自らの学習を調整しようとする側面」で評価することが推奨されている（『ハンドブック』参照）。しかし、いずれの側面も、「思考・判断・表現」と表裏一体に発揮されることを考えると、観点「思考・判断・表現」と観点「主体的に学習に取り組む態度」という2つを区別するのは至難の業であろう。「主体的に学習に取り組む態度」を見るために生徒の自己評価の記述を

評価するといった実践も散見されるものの、自己評価を成績づけするのは教師にとってあまりにも労力がかかる作業になるし、生徒にとっても成績づけの対象となる自己評価を記述するというのはあまりに窮屈なものとなるだろう。

次善の策としては、「主体的に学習に取り組む態度」の観点についても、パフォーマンス課題を用いて評価するという方法が考えられる。パフォーマンス課題は、粘り強く自己調整しながら取り組むことになるため、観点「主体的に学習に取り組む態度」にも適した評価方法だと考えられる。

では、「思考・判断・表現」と「主体的に学習に取り組む態度」の観点とを、どのように区別すればよいのだろうか。たとえば、表3の実践の場合は、1つの課題（英語による紹介文）を2つの観点（「英語表現（の正確さ）」と「内容（の豊かさ）」）で評価し、それらの観点を「思考・判断・表現」と「主体的に学習に取り組む態度」に振り分けるといった判断がなされた。あるいは、授業で取り組む小規模なパフォーマンス課題を観点「思考・判断・表現」に対応するものとして位置づけ、そこから発展させて自ら設定した課題に取り組むことを観点「主体的に学習に取り組む態度」に位置づけるといった方法も考えられるだろう。

先述の通り、観点と評価方法の対応を決めるのは、各学校の裁量となっている。各学校には、各教科の目標や特性を踏まえつつ、観点と評価方法の対応関係を適切に整理して、実行可能な評価計画を立てることが求められている。

## 【参考文献】

西岡加名恵（2016）『教科と総合学習のカリキュラム設計—パフォーマンス評価をどう活かすか』図書文化

西岡加名恵編著（2020）『高等学校 教科と探究の新しい学習評価—観点別評価とパフォーマンス評価実践事例集』学事出版